エディンバラ紀行文

菅尾暁

本稿は第 73 回国際古代法史学会（LXXIIIe Session de la Société Internationale Fernand de Visscher pour l'Histoire des Droits de l'Antiquité、略称 SIHDA）に参加した際の体験を、記憶を辿りつつ、まとめたものである。何度もご参加されている諸先生方を差し置いて、このような執筆をするのは甚だ恐縮であるが、初参加者の立場から、これからご参加を検討する方々が様子を少しでも垣間見ることができるものとなればと思い、記すこととした。

今大会は 2019 年 9 月 3 日（火）から 7 日（土）までの 5 日間に渡って開催された。場所は、スコットランドの首都・エディンバラである。筆者にとって国際学会への参加自体が初めてであり、時差ぼけのまま大会を迎えないように余裕をもって、9 月 1 日（日）に日本を発った。エディンバラへの経路としては、ロンドン・ヒースロー空港経由という選択肢もありえたのだが、巨大空港での混雑を避けるために、ヘルシンキ空港経由を選択した。日本を飛び立ち、13 時間超のフライト（加えてヘルシンキ空港で 2 時間ほど滞在）を経て、エディンバラ空港へ到着した。そこから 30 分ほどシャトルバスに揺られ、市の中心部にあるウェイヴァリー駅付近のバス停に降り立った。早速目に飛び込んできたのは、スコット・モニュメント（文豪サー・ウォルター・スコットを記念して建築）とエディンバラ城である。荘厳な雰囲気に、エディンバラに到着したという実感が漸く湧き始める。緊張と不安が入り混じった言い知れぬ感覚を抱きつつ、坂道や凹凸のある道を、重いトランクを転がしながら、宿泊ホテルのあるグラスマーケットに向かった。グラスマーケット

は、死刑執行場として使われていた歴史もあるが、現在ではパブやレストランが並ぶ空間となっている。宿泊ホテルはその一角にあり、広場を挟んで向かいにそびえ立つエディンバラ城は（不安の表れか）巨大な壁のように感じられた。ここに宿を決めたのは、学会会場まで 5 分ほどで行けると見込んでのことである。ホテルに到着した時点ですでに夜に差し掛かっていたので、その日は近くのレストランで夕食を済ませ、荷解きをして終わった。

翌 2 日（月）は、エディンバラ市街を散策することにした。エディンバラ城やセント・ジャイルズ大聖堂、ホリールードハウス宮殿、カールトン・ヒルなど主だった観光名所を足早に回り、ホテルに戻った後は、報告準備に勤しんだ。

大会一日目・3 日（火）は 19 時からスコットランド国立博物館でウェルカムパーティーが催される。そこで、午前中にスコットランド国立博物館の場所を確認しつつ、学会会場に向かい、登録をして、SIHDA 特製バッグと大会資料、報告者特典の USB メモリなどを受け取った。夜のウェルカムパーティーは、大会主催者と開催校から簡単な挨拶があった後、立食形式で参加者同士が自由に交流を深めるというものであった。初参加者の身としてはこのような場は心細いものであるが、他の先生から知り合いの先生をご紹介頂いたり、事前に挨拶をしておきたかった先生にお声掛けさせてもらうことができた。

大会二日目・4 日（水）からは、いよいよ大会本番である。10 時から 45 分間のオープニングセッションが行われた後、15 分間の小休憩を挟み、報告会が始まった。報告会は全部で 10 セッションで構成され、各セッションは 2 ～ 4 報告を一まとまりとして一名の司

会者を付けられている。各報告は報告時間 20 分、質疑応答時間 10 分を目安として進行される。今大会では、報告者が 136 名を数えたこともあり（参加者全体では 200 名を超えたそうである）、5 つの会場で報告が同時進行された。各セッションの間には 1 時間のランチタイムや 30 分のコーヒー・ブレイクが設けられている。報告には 10〜20 名程度が参加することが多く、時に 30 名近く集める報告もあった。全体的に、格式張らず距離感の近い雰囲気で自由闊達に議論される印象を受けた。報告方式としては、一般的にはレジュメの配布を基本とし、パワーポイントとの併用も多く見られた。中にはレジュメを配布せずパワーポイントのみの報告も散見されたが、参加者の反応を見る限り、やはりレジュメの配布は必要とされているように感じた。

これまで日本の学会の参加経験しかなかった筆者にとって驚きであったのが、各会場の往来についてである。各セッションの間はその会場に留まり、連続して報告を聞くものだと考えていたのだが、大会では、報告が終われば（中には終わる少し前に）次の時間帯に行われる報告に向け、他会場に移動する光景がしばしば見られた。そのため、場合によっては次の報告開始に間に合わせるために質疑の最中に移動を始めてしまう参加者も少なくなく、また逆に、発表が始まってから他の会場から移動して入ってくる参加者も珍しくなかった。これはセッション内の報告内容や使用言語（フランス語、英語、ドイツ語、イタリア語、スペイン語）などと関係があるのかもしれない。

18 時から 19 時半には、レセプション＆パーティーが大学の中庭で行われ、バンドの演奏の下、盛況のうちに終わったとのことであ

る。伝聞なのは、筆者は翌日の報告に備えて欠席したからである。

大会三日目・5 日（木）は 9 時から 17 時まで、前日と同様に報告会（4 セッション）が開催された。ただ、前日と違うのは、筆者の報告があることである。セッションが始まる少し前には報告会場に入り、司会者、そして他の報告者の先生方に挨拶をさせてもらった。おそらく極度の緊張が周囲にも伝わっていたものと思われるが、報告経験のある先生からのご助言に従い、報告中は原稿だけを読むのではなく努めて参加者の様子を伺いながら報告した（つもりである）。質疑の時間には残念ながら質問を得られなかったが、セッション終了後に他の報告者から質問を頂戴したのは有難かった。今回の報告に当たり、できる限りの準備をしてきたつもりであったが、20 分という限られた時間で報告内容を十分に理解してもらう更なる工夫をしなければ質問を得られないことを再認識した。次に大会に参加する際の課題である。

18 時半からは別会場において、夕食会が開かれた。ここではバイキング形式で食事を取り、思い思いの場所で 10 名程度が円卓を囲むというものであった。会の中盤を過ぎたあたりで、希望した参加者（とそれに巻き込まれた参加者）がバンドの演奏（そして指導）の下、スコットランドの伝統的なダンスに挑戦するということがあった。仄聞するに、このような催しは数年前から行われるようになったとのことである。多少驚いたが、こういった交流の仕方も面白く感じた。21 時が近づいてもなおダンスと演奏が続く中、自由解散の雰囲気に紛れて、失礼した。

大会四日目・6 日（金）は、9 時から 15 時まで報告会（3 セッション）が行われた。全セッション終了後に、総会が開催された。総

会では、大会開催責任者の慰労、この一年で逝去された先生方の追悼、そして次回大会の案内（チリ・カトリック大学、2021 年 1 月 5～9 日）が行われた。

夜には、由緒ある歴史的建造物であるバルモラルホテルにて晩餐会が催された。事前の案内で指定されていたブラックタイというドレスコードに不安になっていたのだが、持参した蝶ネクタイを普段のスーツに合わせることで特段問題はなかった模様である（もっとも、許される程度は各会場の格式・要求に拠るものと思われる）。上品な雰囲気の中、正装した参加者と共に大会最後の夜を楽しむことができた。

大会五日目・7 日（土）は、ヴィンドランダ要塞とハドリアーヌスの長城へのエクスカーションが企画されていた。しかし、残念ながら、仕事の関係でこの日の早朝に日本に帰国する旅程となってしまっていたため、参加することは叶わなかった。ローマの遺構に接するまたとない貴重な機会を逃した喪失感と、大会参加を終えた安堵感を胸に、帰途についた。

本稿は紀行文として執筆したため、大会の報告内容については、要旨集（学会ホームページにて掲載）や、今後刊行される RIDA 67(2020)をご参照いただきたい。

今大会では、筆者以外にご参加された日本からの先生方（五十君麻里子先生、葛西康徳先生、川島翔先生、佐々木健先生、田中実先生、林智良先生、吉村朋代先生（五十音順））からの多岐に渡るご助言のおかげで、当初は心細かった国際学会デビューを（ひとまず）無事に終えることができた。また、事前に学会の様子や手続きをご

教示くださった西村重雄先生の存在がなければ、今回このような貴重な経験を得ることもなかったと思われる。研鑽を積むことで御恩をお返しする決意を示すとともに、ここに厚く御礼申し上げる。

この駄文が、これから当学会へのご参加を検討する方々の参考になれば、幸いである。

＜今大会関連スケジュール情報＞

2019 年 3 月 31 日　早割（アーリーバード）申込み（予定数に達したため月末を待たず終了）

2019 年 5 月 31 日　題目、報告要旨（500 字以内）を提出

2019 年 8 月 16 日　参加申込締切

2019 年 9 月 3 ～7 日　大会開催

大会一日目・3 日夜：ウェルカムパーティー

大会二日目・4 日：オープニングセッション、第 1 ～第 3 セッション報告、立食パーティー

大会三日目・5 日：第 4 ～第 7 セッション報告、夕食会

大会四日目・6 日：第 8 ～第 10 セッション報告、総会、晩餐会

大会五日目・7 日：エクスカーション

2019 年 12 月末　RIDA 67(2020)への原稿提出